



Title	看護学専攻大学生の自我同一性地位の諸相
Author(s)	師岡, 友紀; 室井, みや; 柴, 枝里子 他
Citation	大阪大学看護学雑誌. 2010, 16(1), p. 9-17
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/56727">https://doi.org/10.18910/56727</a>
rights	©大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 看護学専攻大学生の自我同一性地位の諸相

師岡友紀\* 室井みや\*\* 柴 枝里子\*\*\* 小林珠実\* 福録恵子\* 清水安子\*

瀬戸奈津子\* 鈴木純恵\*\*\*\* 梅下浩司\*

## 要 旨

本研究は、看護学を専攻する大学生の自我同一性地位の分布を把握するとともに、進路選択に関する思いを調査し、教育や進路指導に活用できる発達心理学的資料を得ることを目的として調査を行った。対象は本学看護学専攻の大学生1～4年生とし、自己記入式質問紙により、自我同一性地位判定尺度および専攻領域選択に関する項目への回答を求めた。

回答が得られた260名を分析した結果、同一性達成地位にあるものは5%未満であり、対象者の大半が自我同一性形成過程にあることが示された。また、自我同一性地位と専攻領域の満足度・変更希望・臨地実習負担感には関連性が認められ、自我同一性拡散傾向のあるものは満足度が低く変更希望が大きいこと、および権威受容傾向にあるものは実習負担感が小さいことが示唆された。看護の学習内容が自我同一性と関連することをふまえ、同一性形成を支援することを念頭に教育指導を行うことは意義があると考えられる。

キーワード: 自我同一性地位、看護学生、発達心理、進路選択、

Identity Statuses, Nursing Students, Developmental Psychology, Course selection,

## 1. はじめに

Erikson によると、青年期は進路・職業・パートナー・価値観など人生にとって重要な事柄について決定し選択していく時期で、「自分とはどのような存在か」について悩んだり考えるという危機に直面する。そうした危機を通して自分らしさを見つけ、自己に対する肯定的かつ確信的な感覚を得ることを「自我同一性達成 (Identity Achievement)」とし、これを青年期の発達課題としている。一方、自分が何なのかつかめず、これからどうしたいかわからない状況に陥ることを「自我同一性拡散 (Identity Diffusion)」としている。高校生から大学生は青年期にあると想定され、自我同一性の形成過程にあると考えられる。

自我同一性の実態を把握するにあたり、しばしば Marcia の理論が用いられる。Marcia は Erikson の述べる自我同一性を個人がどの程度達成してい

るか表すにあたり、「自分にとっての重要な決定や選択を真剣に迷ったり考えたりする時期があったかどうか」という「過去の危機の有無」および「自分の人生にとって重要な領域に対して積極的で主体的な関与をしているかどうか」という「自己投入の有無」を基準としている。そして、この2つの基準により4つの自我同一性地位を分類している。まず、「同一性達成地位 (Identity Achievement)」は、危機を経た上で現在自己投入の対象を持っている者である。次に「権威受容地位 (または早期完了地位、Foreclosure)」は、危機を経ることなく親の価値観や社会通念を吟味することなく無批判に自分のものとして受け入れており、一見、同一性達成のように見えるが自分の価値観をゆるがされるような状況では防衛的になったり混乱したりするなど権威主義・融通のきかなさを特徴とする者である。「積極的モラトリアム地位 (Moratorium)」は、自己投入の対象

\*大阪大学大学院医学系研究科 \*\*兵庫県立医科大学 \*\*\*大阪府立母子保健総合医療センター \*\*\*\*獨協医科大学

を主体的に獲得しようとして現在危機のさなかで積極的な努力を行っている者、「同一性拡散地位 (Identity Diffusion)」は、過去の危機の有無に関わらず現在自己投入を行っていない者である<sup>1)</sup>。

看護学を専攻する大学生は、受験校や学科を決定する時点で将来の職業を検討したと考えられる。職業と分離しがたい進路選択は自我同一性における大きな危機となりうるが、そうした経験を通して自我同一性達成に至っているとは限らない。たとえば、本来希望しなかった選択肢を選んだ場合、納得できず主体的に受け入れられないことで思い悩み危機が継続するほか、希望した選択肢であっても同一性地位はある程度の期間を経て移行すると考えられるからである<sup>2)</sup>。

一般に大学生は社会的責任を猶予された状態で一種の支払猶予期間 (モラトリアム) にある。しかし、看護学領域では学習事項が将来の職業と直結し、とりわけ臨地実習では社会的責任が問われる場面が多い。その結果、自分の「生き方」に対する思いが学習意欲や負担感に大きく影響すると考えられる。従って、自我同一性の状況という発達心理学的な情報を把握することは、看護学専攻の大学生に対するより良い教育を検討するにあたり、大きな意義がある。

日本の看護系の大学生を対象として自我同一性地位を調査した研究では、同一性地位の差異により大学入学以前の看護職の検討の在り方が違い心理的安定感に差異が認められることが示されている<sup>3) 4)</sup>。また、質的研究結果から臨地実習と自我同一性との関連性も示唆されている<sup>5)</sup>。つまり、同一性地位のあり方により看護専門教育に対する思いや学習過程の負担感が異なる可能性が示唆されるが、十分な検討はなされていない。

そこで、本研究は、本学看護学専攻の大学生に対して、自我同一性地位の分布を把握するとともに先行研究結果と比較し本学の特性をとらえ、教育の在り方に示唆をえることを第一の目的とした。加えて、自我同一性地位の違いにより、専攻領域に対する満足度および進路変更希望、臨地実習の負担感の

差異の有無を明らかにし、教育指導のあり方を検討する目的で調査を行った。

## II. 研究方法

1. 対象者: 本学看護学専攻学生 (1 年次～4 年次) 334 名とした。

2. 調査期間: 2008 年 7 月～10 月に実施した。

3. 調査方法: 自己記入式質問紙法にて行った。調査票配布は研究者の担当する講義終了後、または領域別臨地実習の終了後に実施した。研究者が研究説明協力依頼書と調査票を配布し、口頭で研究の説明と協力依頼を行った。回収は回収箱と郵送を併用した。無記名調査のため回答をもって研究への同意とみなした。

4. 調査内容

(1) 基本属性: 性別・年齢・学年に対する回答を求めた。

(2) 進路に関する基本的背景: 専攻領域決定時期・専攻領域決定因・大学決定時期・大学決定因に関して選択肢を提示し回答を求めた。

(3) 同一性地位判定尺度: 「同一性地位判定尺度 (Identity Status Scale)」<sup>6)</sup>を用いた。この尺度は Marcia の自我同一性地位の考え方にもとづき作成されたもので、同一性の状態を判定することが可能であり、信頼性妥当性は検証されている。下位尺度は「現在の自己投入」「過去危機」「将来の自己投入への希求」であり、それぞれ 4 項目ずつ計 12 項目からなる。回答は 6 件法で得点化し、下位尺度の得点を算出し、それらの尺度得点にもとづき、表 1 のいずれかの同一性地位を判定する。

(4) 専攻領域に関する質問: いずれも研究者内で検討し独自に作成した。

① 専攻領域満足度: 専攻領域に関してどの程度満足しているか「まったく満足していない」～「かなり満足している」の 7 件法で評定を求めた。

② 専攻領域変更希望: 専攻領域の変更希望がどの程度大きいのか「まったく変更したくない」～「かなり変更したい」の 7 件法で評定を求めた。

表1. 同一性地位(加藤,1983をもとに作成)

同一性地位	過去	現在	将来
同一性達成地位(A)	高い水準の危機を経験 (20点以上)	高い水準の自己投入を行っている (20点以上)	-
同一性達成-権威受容中間地位(AF中間)	中程度の水準の危機を経験 (15-19点)	高い水準の自己投入を行っている (20点以上)	-
権威受容地位(F)	低い水準の危機しか経験せず (14点以下)	高い水準の自己投入を行っている (20点以上)	-
積極的モラトリウム地位(M)	-	中程度以下の自己投入しか行っていない (19点以下)	自己投入の希求は強い (20点以上)
同一性拡散-積極的モラトリウム中間地位(DM中間)	-	中程度以下であるがそれほど低くない自己投入(13-19点)	自己投入の希求は中程度である (15-19点)
同一性拡散地位(D)	-	低い水準の自己投入しか行っていない (12点以下)	自己投入の希求は弱い (14点以下)

③臨地実習の負担感:身体的負担・精神的負担それぞれに関して、「ほとんど負担は大きくなかった」～「非常に負担が大きかった」の5件法で評定を求めた。

#### 5. 倫理的配慮

研究者と対象者が教員と学生という関係にあること、研究者が対象者の受講する科目の単位認定者(あるいは科目分担者)であること、調査票の配布を講義や実習の終了時に行うことから、対象者が研究参加に対する圧力を感じる恐れがあった。そのため、研究と成績が無関係であること、調査への参加の有無や回答内容によって不利益を受けないこと、結果は数値化し統計的に処理するため個人を特定しないこと、参加は対象者の自由意思であることなど文書を用いて説明した。また、調査は無記名とし封筒を用いて回収し本人が特定しないよう配慮した。さらに回収箱は時間を決めて設置し研究者の目前で回収することのないように配慮した。これら説明・依頼・同意の手続きについては大阪大学保健学倫理委員会の承認を得て行った。

### Ⅲ. 結果

#### 1. 対象者の特性

対象者 334 名のうち 305 名に調査票を配布し 260 名の回答を得た(回収率 85.2%)。性別は男性 29 名(11.2%)、女性 229 名(88.1%)で、平均年齢は  $20.3 \pm 1.6$  歳(18-25 歳)であった。

大学決定時期と専攻領域決定時期を図1に示した。専攻領域に関しては「高校生3年生前期」までに決定しているものは約 50%であり、「高校3年生後期」が 30%程度と最も比率が大きかった。その他(17.3%)の回答では「浪人中」が最も多く、「浪人中のセンター試験後」と注釈を加えている場合もみられた。さらに「別の大学に在籍中」との回答も認められ大学入学後に進路転向した経緯が察せられた。大学決定時期と専攻領域決定時期を比較すると高校在学中に決定している割合がおおよそ 70%という点は共通していた。

専攻領域決定因として最も影響力が大きかったのは、自分自身の希望(68.5%)との回答の割合が最も大きく、成績(16.2%)、親(5.4%)、高校教員(3.1%)、予備校(0.8%)、その他(6.3%)であった。その他の記述として、友人、兄弟、なんとなく、テレビや本などメディア、家族の病気や死、などが認められた。一方、大学決定因については、自分自身の希望(56.9%)、成績(22.7%)、高校教員(5.8%)、親(5.0%)、予備校(1.2%)、その他(8.4%)であった。

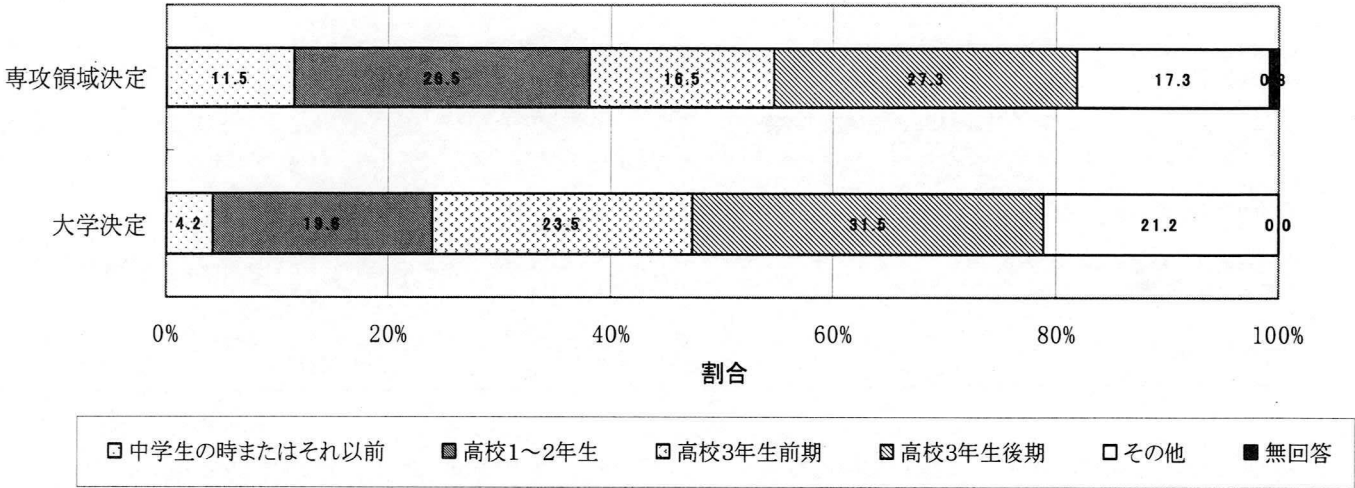


図1. 専攻領域決定時期と大学決定時期 (N=260)

表2. 自我同一性の分布の比較

調査時期	本研究 2008		柴田 (2005) 2005      2004		小笠原 (1997) 1996	加藤 (1983) 1982			
	対象	本学看護学専攻学生1～4年生	教員養成系受講の 看護学専攻学生		看護短期大学部 1～3年生	2つの国立大学 1～4年生			
対象者数	260名		41名	41名	271名	310名			
	度数 (名)	割合 (%)	割合 (%)	割合 (%)	割合 (%)	割合 (%)			
同一性達成地位 (A)	10	3.8	10.3	12.8	10.7	11.6			
権威受容地位 (F)	11	4.2	17.2	10.3	1.1	3.9			
AF中間地位 (AF)	32	12.3	3.4	5.1	14	12.3			
積極的モラトリアム地位 (M)	25	9.6	3.4	0	7.4	15.2			
同一性拡散地位 (D)	12	4.6	13.8	12.8	1.5	3.9			
DM中間位置 (DM)	170	65.4	51.7	5.9	65.3	53.2			
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD			
過去の危機	17.1	2.9	16.4	4.3	16.3	4.7	データ記載なし	17.2	3.3
現在の自己投入	16.7	3.6	17.2	3.7	17.6	3.4	データ記載なし	17.8	3.1
将来の自己投入の希求	17.0	2.8	16.1	3.3	16.5	2.9	データ記載なし	17.5	3.1

## 2. 同一性地位の諸相

### (1) 同一性地位の分布

先行研究にて同一性地位に属する男女の人数分布および学年による有意な差は認められていないことから<sup>7)8)</sup>、性別および学年を区別せずデータを分析した。手順に従って同一性の判定を行ったところ、表2のような結果が得られた。加藤(1983)<sup>9)</sup>・小笠原(1997)<sup>10)</sup>・柴田(2005)<sup>11)</sup>の調査では「同一性達成地位」が約 10%だったのに対して、今回の調査では 3.8%と割合が小さかった。また、同一性地位を定義する下位尺度の3変数を比較すると、「現在の自己投入」が他の調査結果と比較して低かった。

### (2) 同一性地位と専攻領域に対する満足度と変更希望

専攻領域満足度と専攻領域変更希望の回答を間隔尺度とみなし 1 点～7 点に得点化した。すなわち、それぞれ得点が高いほど満足度が高い(変更希望が強い)ことを意味するよう数値化した。

専攻領域満足度の平均得点は 5.0(SD±1.5)で平均的には「どちらかといえば満足している」にあることを意味する。専攻領域変更希望の平均得点は 2.7(SD±1.5)で平均的に「変更したくない」と「どちらかといえば変更したくない」の中間程度であることを意味する。

同一性地位の分布の違いにより満足度および変更希望に差異が認められるか等分散性の検定を行ったところ、満足度・変更希望いずれも有意差が認められ( $p<.05$  および  $p<.01$ )、同一性の違いにより分散が異なることが示された。

満足度に関して一要因の分散分析を行ったところ有意な主効果が認められた( $F=5.065$ ,  $df=5$ ,  $p<.001$ )。等分散性が仮定されないため Tamhane の多重比較にて群間比較を行ったところ、「同一性拡散地位」は、「権威受容地位」「AF 中間地位」と比較し満足度が有意に低かった(いずれも  $p<.05$ )。また、「DM 中間地位」は、「AF 中間地位」と比較し有意に満足度が低かった( $p<.01$ )。このことは、同一性拡散地位および DM 中間地位は、専攻領域に対

する満足度が比較的低く、権威受容地位・AF 中間地位は専攻領域に対する満足度が比較的高いことを意味する(図2)。

一方、変更希望に関しても同様に、一要因の分散分析を行ったところ有意な主効果が認められた( $F=7.700$ ,  $df=5$ ,  $p<.001$ )。等分散性が仮定されないため Tamhane の多重比較にて群間比較を行ったところ、「権威受容地位」は、「積極的モラトリアム」「同一性拡散」「DM 中間」より変更希望が低く(いずれも  $p<.05$ )、「AF 中間地位」は、「積極的モラトリアム」「同一性拡散」「DM 中間」より変更希望が低かった(いずれも  $p<.05$ )。このことは権威受容地位および AF 中間地位は、専攻領域変更希望が比較的低いと言える(図3)。

同一性地位の違いにより実習の負担感に差異が認められるか、臨地実習を経験している3年生4年生の計 112 名を分析対象とし検討した。臨地実習の負担感の回答を間隔尺度とみなし 1～5 点に得点化した。身体的負担感の平均値および標準偏差は、同一性拡散が  $4.67\pm0.58$  であり最も負担感が大きく、AF 中間  $4.19\pm0.66$ 、DM 中間  $4.12\pm0.78$ 、同一性達成  $3.80\pm1.79$ 、権威受容  $3.38\pm1.19$  と続き、積極的モラトリアム  $3.36\pm1.36$  が最も身体的負担感が小さいことが示された。精神的負担感は、身体的負担感と同様に同一性拡散  $4.67\pm0.58$  の平均値が高かったが、以後は DM 中間  $4.43\pm0.81$ 、積極的モラトリアム  $4.18\pm0.98$ 、同一性達成  $4.00\pm1.73$ 、AF 中間  $3.94\pm1.12$  と続き、権威受容  $3.38\pm1.30$  が最も平均値が低く精神的負担感が小さいことが示された。

同一性地位の分布の違いにより身体的負担感および精神的負担感に差異が認められるか等分散性の検定を行ったところ、身体的負担感に有意な差が認められ( $p<.01$ )、同一性地位の違いにより分散が異なることが示された。一要因の分散分析を行ったところ、主効果が見出された(身体的負担感: $p<.05$ , 精神的負担感: $p<.05$ )。多重比較を行ったところ身体的負担感には有意な群間差は見出されなかったが(Tamhane の多重比較)、精神的負担感に関し

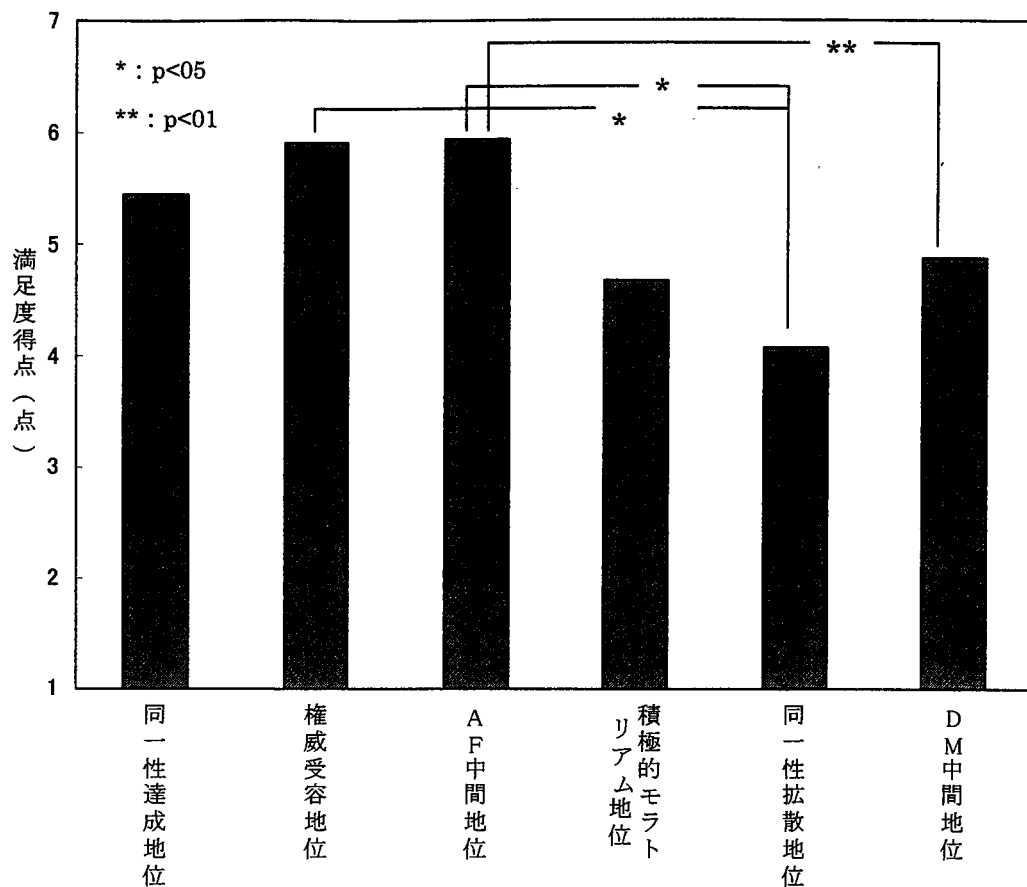


図2. 同一性地位による専攻領域満足度の比較

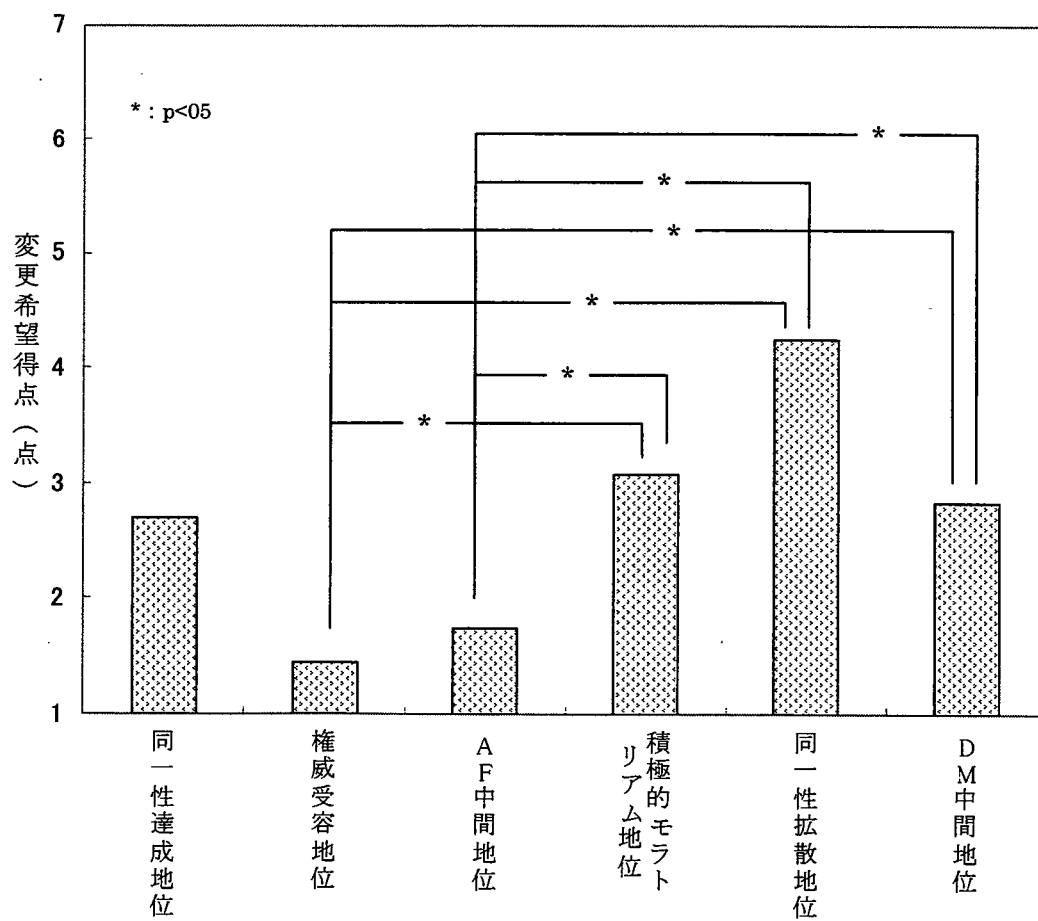


図3. 同一性地位分布による専攻領域変更希望の比較

ては「権威受容地位」が「DM 中間地位」より有意に精神的負担感が小さいことが示された (Tukey の多重比較  $p<.05$ )

#### IV. 考察

本研究は、本学看護学専攻の学生の自我同一性地位の分布を把握し、先行研究結果と比較し特性を明らかにするとともに、自我同一性地位の違いにより、専攻領域に対する思いに差異が認められるか検討し、自我同一性と看護専門教育との関連性を検討した。

##### 1. 対象者背景と自我同一性の分布について

専攻領域決定や大学決定の時期は高校以降が大半で、大学入学以前に進路決定という危機に直面してきた経緯が察せられた。専攻領域や大学の決定因を「自分自身」とする回答は 60%~70%で、30~40%は専攻する領域や大学を決めるという選択を自分の責任として引き受けることができていない状況が察せられた。こうした回答は自我同一性達成地位にあるものの割合が小さいこと、高い水準の自己投入を行えているものの割合は低いという結果を裏付けるものでもあろう。

先行研究の結果と比較すると、調査時期による分布の差異に時代の変化に伴う一定の方向性は見出せなかった。したがって分布の違いは調査集団の特性が反映しているとの解釈は可能である。先行する調査では同一性達成地位の割合は 10~12%程度であるが、本学学生は 3.8%と著明に低く同一性達成の割合の低さが本学学生の特性のひとつと言える。

このことから、本学看護学専攻学生の多くは、いまだ自我同一性の形成過程にあり、大学入学後の経験を通して自我同一性が形成されていくと考えられる。現在、看護師の早期離職が問題視されているが、就職後も自我同一性が達成されていないという個人の問題や、看護師という職業に自己投入できないことが影響している可能性がある。教育側としては、看護職になることを前提として関わるのではなく、それぞれの学生が「看護専門教育や看護職として

働くことが自己投入の対象となりえるか見極めていく」という過程を支援することが効果的と考えられる。

##### 2. 同一性地位の差異と専攻領域の満足度・変更希望について

結果から、同一性地位の違いにより専攻領域の満足度と変更希望に有意な差異が認められた。大学生を対象とした先行研究では、「生き方や価値観」「将来の仕事」などに関する危機は同一性地位に関連しているが、「勉強」に関する危機においては差異が認められていない<sup>12)</sup>。このことから、看護学専攻領域という進路は、生き方や将来の仕事に直結するが故に、単なる「勉強」とは異なり自我同一性形成における大きな構成要素となりうることが示唆された。すなわち、看護という専攻領域の学習過程には「生き方」の問題が関わるため、評価においても配慮が必要と考えられる。

本学では、退学・休学・転学となる学生は毎年一定の割合で存在し、臨地実習でも「やる気のない学生」が話題になるが、このことは自我同一性の問題として考えると理解しやすい。一般に「自我同一性」とは、各個人が出生以来獲得を続けてきた数多くの「～という存在としての自分」を、主体的に取捨選択し秩序づけ統合することによって成立する「社会内存在としての自己の定義<sup>13)</sup>、」とされる。「同一性拡散地位」と「DM 中間地位」は、専攻領域に対する満足度が低く変更希望が高い傾向が認められたが、言い換えると、看護学専攻という進路にある自分を主体的に選択して統合することができていないのだろう。

教育側としては、学生が既に所属している専攻領域そのものについても迷ったり悩んだりしうることを考慮する必要がある。やる気がないと判断するのではなく、なぜ看護が自己投入の対象となりえないのかを考え働きかける方が望ましいと考えられる。学生が青年期であることを考慮した関わりが効果的であり、教科(学習内容)への興味関心を高められるような教育サイドの工夫も必要である。

##### 3. 同一性地位の差異と実習負担感について

権威受容地位にあるものは、実習の精神的負担



感が小さいことが示された。これは、もともと権威受容地位が、他者の価値観を批判することなく受け入れる傾向にあることとも関連していると言えよう。臨地実習に対して学生が負担なく取り組むことができていると感じた場合、教育側としては「問題ない」とみなすのではなく、進路としての十分な検討がなされているか考慮して関わるのが望ましいと考えられる。大野(1995)<sup>14)</sup>は、「権威受容型であることを意識化することで、別の地位に移行する」と報告している。そうした例をふまえ、教育活動の中で学生が自我同一性を形成できるような支援も必要である。

なお、本調査の結果から、実習負担感と同一性地位との因果関係は明らかになっていない。同一の対象で臨地実習前後に比較するなど、別の調査により評価する必要がある。

## V. まとめ

1. 本学看護学専攻学生の自我同一性地位の諸相が明らかになった。同一性達成地位にあるものの割合は5%に達せず、高い水準の自己投入ができていないものの割合が低いことから、学生が青年期にあり同一性形成過程にあることを前提とした教育が必要である。
2. 自我同一性地位の違いにより、専攻領域に対する満足度・進路変更希望・臨地実習負担感に差異が認められ、看護学専攻の学習は同一性形成に強く関連するものであることが示唆された。したがって専攻領域における教育にあたっては、同一性地位を考慮した指導や関わり、評価が有用と考えられる。

## VI. 謝辞

本研究は大阪大学多様な人材活用推進委員会研究支援員制度の助成を受けたものである。

## VII. 引用文献

- 1) Marcia James E., 1966, Development and Validation of Ego Identity Status, *Journal of Personality and Social Psychology*, 3(5),

551-558.

- 2) 大野久, 1995, 青年期の自己意識と生き方, 落合良行・楠見孝(編), 自己への問い直し—青年期—(講座生涯発達心理学第4巻), 金子書房, 89-123.

- 3) 小笠原昭彦, 鈴村初子, 1997, 看護短期大学学生の自我同一性地位と対人関係 時間的展望及び職業選択の関連, 名古屋市立大学看護短期大学部紀要, 9, 87-96.

- 4) 小笠原昭彦, 鈴村初子, 1998, 看護短期大学学生の自我同一性地位と看護職イメージ, 名古屋市立大学看護短期大学部紀要, 10, 81-90.

- 5) 久川洋子, 2002, 看護学生におけるアイデンティティ達成状況と学習行動の関連 アイデンティティ達成への教育の必要性をめぐって, 天使女子短期大学紀要, 18, 1-13.

- 6) 加藤厚, 1983, 大学生における同一性の諸相とその構造, 教育心理学研究, 31(4), 292-302.

- 7) 前掲 6)

- 8) 前掲 3)

- 9) 前掲 6)

- 10) 前掲 3)

- 11) 柴田恵子, 吉岡久美, 2005, アイデンティティ・ステータスの地位分類にみる学生の傾向 K大学教員免許取得課程学生の調査結果分析, 日本看護学会論文集 看護総合, 36号, 493-495.

- 12) 前掲 6)

- 13) 前掲 6)

- 14) 前掲 2)

## VIII. 参考文献

- 1) Erikson, E. H.: Psychological Issues Identity and the life cycle International Universities Press, 1959, 小木啓吾(訳・編), 自我同一性, 誠心書房 1980.
- 2) Erikson, E. H.: Identity, Youth and Crisis, W.W. Norton & Co., 1967, 岩瀬庸理(訳), アイデンティティ、青年と危機, 金沢文庫, 1994.
- 3) Erikson, E. H.: The life cycle Completed,

W.W. Norton & Co., 1982, 村瀬孝雄、近藤邦夫  
(訳), ライフサイクル、その完結, みすず書房,  
1990.

4) 加藤厚, 1986, 同一性測定における 2 アプローチ  
の比較検討, 心理学研究, 56(6), 357-360.

5) 堀洋道監修: 心理測定尺度集 I 人間の内面を探  
る<自己・個人内過程>95-100, サイエンス社,  
2001.